

【鳥越】

このような会を何回か継続しているんですが、もう少し皆で議論をする場といいますか、時間を十分にとった方が面白いだろうと私たちは考えました。報告者の中にも、賢そうに見えるけれども、怪しげな内容のことを言っていることもありそうです。“怪しげ”という意味は、大胆すぎるのだけれども、大変クリエイティブといいますか、新しいものを出せる可能性を持っているという意味です。この 4 人は素晴らしい報告をなさいましたけれども、これからの話し合いを通じてそれを超えるアイデアが出てくるかもしれない。その結果を、私達の財産として持ち帰ろうと思います。

最初にまとめが必要かと思えます。それに皆様からいただいた質問も入れて、それに答えていただこうと思えます。

第一報告の菅さんは、公・共・私という3つに分けたうえで、とりわけこの「共」にあたることの重要性をご指摘になりました。具体的には、“在地”という言葉が使われましたけれども、わかりやすい言い方をすればコミュニティになると思うんですが、コミュニティ管理の重要性を言われました。ただここで、公・共・私のバランスの良い“入れ子構造”が必要だと言われました。ここのところは聞いている人から突かれますね。バランスが良いなんて言ったら、当然ではないか。バランスが良いとは何かという質問。それと、この“入れ子構造”は便利な言葉で、わかったように思えますが、「“入れ子構造”とは何か？」ということが当然問題になります。まわってきたペーパーによると、会場からは、「私的・共的管理の関係の方向はどうか。現状ではそこからの志向がネックになっているように見える」「公・共・私ということ考えた場合、権限及び財源も関わってくると思うんですが、この配分をどのように考えるのか」「入れ子構造とか、バランスの良いと言っても、権限をどのように考えるのか」というご質問がありました。それに加えて、「“入れ子構造”にあるとは、一体どのようなことなのでしょう。単に規模の大小であるならば、現状でも入れ子構造であると思いますが、それがどう違うのか」という質問も出てきております。つまり、「バランスの良い入れ子構造」と言われるけれども、これをもう少し突っ込んで話をしてほしいということです。

ここが面白いと思ったのですが、「私」ではなくコミュニティが、共的意志のもとに責任を持っていくと被害の格差が少ないという指摘です。ただ、そうすると、「お前らコミュニティ内だけの話じゃないか」「他のコミュニティとの格差の方はどうなる」ということが当然考えられます。そのことは当然菅さんも考えられていて、それを“輪中根性”というかたちで言われたのでしょうか。私はこのアイデアをおもしろいと思いつつも、政策を考える時に、被害の格差が少ないという論理で納得していいかどうかは、個人とかその家同士を比較した場合は言えるけれども、コミュニティ同士を比較したら、この論理はどうなるのかと思いました。それから、もう 1 つこれと関わっての質問ですが、「行政と住民はどのような行動をとれば具体的にいいんでしょうか」「輪中の共同体から何か学ぶことがあるんでしょうか」というご質問がありますので、これらをお答え頂くなかで、ここで述べた課題は明確になってくるかと思えます。

あと、特に面白いなと思ったところが、「安全というものが資源である」ということを結論として言われ

ました。これはなるほどなと思いました。安全を資源という側面から考える。それと、これは時間がなかったのであまり言われなかったんですが、「“入れ子”にするには公の役割が必要だ」「Co-Management のためには公の役割が非常に大切である」というご指摘をなさいましたが、ここをもう少し言及していただいた方がいいかと思います。

次の中谷内さんの「リスク認知と合意形成」では、合意形成の困難性、合意形成は実に難しいんだというご指摘を千歳川の例を具体的に出してお話になりました。これは大切な指摘です。特に、「十数年話し合っても歩み寄りというものは出来ないんだ」という指摘は考えさせられます。一般的には長年それぞれ膝を突き合わせて話し合えば理解できるというのが、気持ちとしてあるんですが、「いや、そうじゃないんだ」というご指摘は大変刺激的で、言われてみればそうだろうなと思います。つまり生活が掛かっているから、そんな話し合っただけで「ああ、わかりました。貴方の意見に従いましょう。この辺で妥協しましょう」ということが出来ない。このご指摘は面白いです。そこで、何らかの社会的決定が必要だということで、一般市民がキャスティング・ボードを握り始めている、一般市民そのものについて考えないといけないという指摘です。一般市民は知識不足でゼロリスク、全然危険でないようなものを求めがちだと行政は言うのですが、具体的に調べてみるとそうではない。知識が増えると、リスク認知の分極化が発生する。この“認知”という言葉と“知識”という言葉の違いを説明してもらった方がいいかもしれません。ご講演の間、私の隣に座っていた嘉田由紀子さんは、この“認知”は“経験”なのでは、とささやかれました。それは確かに考えられる指摘です。それと私共が政策を考えてきた時に、行政には政策立案権があります。他方、一般市民が段々と重要性を増してキャスティング・ボードを握っていく。従って一般市民について考えなければいけないと仰ったのですが、この“一般市民”というのが実はあやふやな概念で、中谷内さんのように調査票を配って、量的調査を主にする場合には一般市民を捉えられるのですが、行政政策をする人から見る時には、ヒアリングをする場の市民であれ、あるいは運動体に属する人は、一般市民のうちの特定の人なんですよ。この人達が現状を動かしていく側面が大変強い訳なんです。一般市民論は、政策水準で議論すべきではないかと思いました。それから中谷内さんのご研究された発表は大変論知的で隙がないんですが、唯一の辛いところは、最後に初めに戻ってしまうことです。これは中谷内さんの論理が弱いからではなくて、この論理構成をしてしまうと、戻ってしまうのは、「合意形成は困難である」という話になって、それじゃあどうしたらいいのかと言ったら、「人々の価値に配慮しなさい」というオチになってしまう。これは会場からも「価値の折り合いがあり得るのか」という質問が出ています。論理の構成としては辛いところがあるんですが、具体的な例を出して頂くことで、説明できるかなと思います。

第三報告の大窪さんのは、「ああ、こんなことが京都で行われているのか」ということがたくさんあって面白かったです。特に私は阪神・淡路大震災を具体的に経験したものですから、「日常に使えるかたちに、水撒きなどをしておかないといけない」という指摘は、実にその通りだと思いました。阪神・淡路大震災の後、兵庫県の神戸で審議会が開かれて、そこでもやはり災害を拡大させてしまった側面として「日常に使えるかたちにしておかなければいけない」ということが出てきました。ただこれは京都についての大変丁寧なご指摘なんですが、当然私共は他の都市のことを考える必要があります。大窪さんのお話の中で火回り、防災の組織ですね。私は京都に住んでいたことがあって、「これは京都は文化だな」と思ったのは、「マツチ一本火事の元、魚焼いても家焼くな」と言うんですよ。私は他の都

市に住んでいて、「魚焼いても家焼くな」まで入ってなかった。大阪の新興住宅地に住んでいる時は、単に「火の用心、火の用心」と言っ、僕ら団地の人間は回りました。この「魚焼いても家焼くな」という言葉が出るユーモアとこの面白さが、やっぱり京都の凄さですね。ただ組織的な問題について、今日会場にいらっしゃっている建築史、特にイタリア建築史を得意とされている法政大学の陣内先生に後からコメントをお願いしています。

それから、最後の沖さんのご報告です。今日は特に行政が持っている役割について、鶴見川や神田川の例を出されて、私共にわかりやすく説明してくださいました。ただいくつか隙を見せてしまいました。「里川はコンクリートが美しい」という人が田舎の方にいる。私共もそのことをよく聞いています。しかしながら「コンクリートは美しい」で終わっていいのかどうか。公共事業で整備すると美しく見えて、綺麗になって嬉しい。そこに木を植えてもらって、木も新しく購入して入れると、それは美しいという方がいらっしゃいます。この理解でいいのか。会場からの質問では「都市ではいわゆる道の横を下水と言いません。小さな溝が暗渠化しています。これは雨水浸透障害から見て問題ではないか」と出ています。この暗渠化の問題についてお答え頂きたいと思います。また東京以外の都市水害について「昨年の三条市の場合、ダム災害と思えるものをどう考えるのか」というご質問が出ています。それから縦割り行政の弊害が変わってきて、法律が大変進歩した。現実合うようになってきたというご指摘がありました。ご承知のように、法律はいつも現状から一歩か二歩遅れるもので、法律制定は時間差があって、私達が議論しているものから遅れがちになるんですが、きちんと追いついて来ている。このような良い面についてご指摘頂きました。そして、生きるために必要な面積という、勿論こういう数字は怪しげな数字なんですが、考えるのにすごく良いヒントになる。生きるために食料としては 600 m²。人一人水は 100 m³というのは、ものすごく面白い指摘です。最後、コンパクトシティの必要性について指摘されましたが、ここは都市構想論です。これが沖先生の 1 つの魅力と言いますか、必ずしも一般的に支持されている論理ではないことを仰った。他面、そこに隙が出来ている訳です。コンパクトシティを何と捉えるか。私が記憶しておりますのは、神戸市が阪神・淡路大震災の後に、同市の復興をコンパクトシティ論で議論したことです。その時のコンパクトシティは「皆が歩ける範囲をひとつの単位—タウンにしていこう」と言うことでした。生活を単位にする。だから、ものすごい荒っぽいイメージですが、東南アジアなんか、汚く見えるけれど魅力的な町があるじゃないですか。ああいうものが、コンパクトシティ論の基本ではないかと議論したんです。市長もコンパクトシティを作っていきたいと言ったんですが、様々な弊害があつて今は充分に出来ている訳ではありませんが、震災のすぐ後、都市づくりの基本におけるコンパクトシティです。それは沖さんが言われている六本木ヒルズ型コンパクトシティ論ではありませんでした。六本木ヒルズはご承知のように、高くすることによって土地に余裕ができ、周りは緑を作ることが出来るという論理な訳です。それはそれで 1 つの論理なんですが、少なくとも神戸市はそれと真っ向から対抗する論理を当時は作っていました。このコンパクトシティについても、陣内先生がご専門なんで発言して頂ければ私としては助かります。

会場からのご指摘を、それぞれのご報告のコメントの間にしてきましたが、最後に会場から、全体的な大変重要なご指摘を頂いていますのでそれを紹介します。皆さんに対してですが、「皆さんが誰にとってのリスクを語っているのですか」というご質問ですね。誰にとってのリスクかと捉えることによって、答えは変わって来る。あるものを外すのか、それとも全体なのかという、これは色々な答え方が出

来るんですが、もしそれぞれの4人のご報告者のなかでお答え頂ければ幸いです。

ということで、今から皆様に答えていただきますが、あまり最後綺麗なランディングといいますがまとめしなくてもいいかと思しますので、疑問と思うところはお互いに遠慮なく出して話し合っていくという視点でやりたいと思います。

【菅】

いま、鳥越先生におまとめいただいたので、3点ほどにまとめてお答えしたいと思います。

まず第1点、これが一番大事というか、一番わかりづらかったと思いますが、“入れ子構造”というものです。“入れ子構造”を具現化するものが、Co-management という政策ということになります。それと公的なものが担う資源と権限のバランスについて、次に述べます。さらにもうひとつ、他のコミュニティとの関係性ですね。私の研究は、コミュニティをベースにしているので、今日お話しした在地リスク回避は、コミュニティを価値の中心に据えるスタンディング・ポイントで構想されています。したがって、たとえば、「家」に立脚した問題があるように、コミュニティに立脚すると、さらに別の問題が出てくる。それについて、お答えをしなければなりません。

最初に“入れ子構造”の管理システムですが、まず、この考えが何故出たのかということについて復習すると、「安全」を「資源」と考えてみようというところから発想しました。たとえば、国家が所有する国有林野とか国立公園のような資源、コミュニティが持つ入会林野のような資源、さらに個人が持っている林野のような個人資源。それぞれのレベルにおいて資源管理がなされていますけれども、この多様な資源管理の研究によると、資源管理がうまくいった例には、「管理主体に“入れ子構造”が見られる」と指摘されています。具体的には、1989年に出了た「Nature」という雑誌に掲載されました“The Benefits of the Commons” (Berkes, Fikret, Feeny, David, McCay, Bonnie J. & Acheson, James M. 1989, *Nature* 340: 91-93.)という論文の中に、“nested system”、つまり“入れ子構造”という概念が登場いたします。これは、資源管理研究、特にコモンズ論の画期となる研究論文なのですが、それに“入れ子構造”の例として、日本の漁業権制度、それも共同漁業権制度が具体的事例として参照されています。

日本の漁業では、自分達の地先の水面を自分達の共同体を基盤とした組織が管理できる、あるいは排他的にそこからの収益をあげることができるというような非常に特殊な権限が存在します。その権限は、近世からの古い慣習を根っこに持っているのですが、それだけではなく、明治以降、国家というものが、その在地の慣習を取り入れて、在地の慣習に則って、漁業権法を組み立てたという側面があるわけです。このようなあり方が公と共の“入れ子構造”といえるかと思います。

海外の資源管理研究者は、日本に来てこの制度を知ってとても驚きます。というのは、いまから100年以上も前に、普通ならば近代というものを迎えた時には、国家が新しくすべての漁業権を制定し直して、近代国家の論理でがちがちに作り上げていくということが行われるはずなのに、日本では在地慣習というものを国家という大きな枠組みが取り込んできたたからなのです。ですから、そこに見られる慣習は、けっして昔からあるわけではないし、また、まったく新しい近代が作り上げた近代の国家のものでもない。国の制度と地域に住んでいる人達の制度とが“入れ子”になった状態と表現できます。

この“入れ子構造”と重なるものとして Co-management という考え方が、提示されました。それも、在地社会から学んだ資源管理技術であります。同じく漁業権制度の話になってしまいますが、資源管理の面から Co-management が注目されたのが、実はアメリカであります。アメリカ東海岸の、特にメイン州沿岸のロブスター産業にまつわる漁業権制度で、1995 年に Co-management Law (敢えて訳すならば「共同管理法」という法律が作られました。

これは要するに、資源を管理・利用するため法律を、メイン州などの行政体が地元の漁民と一緒に作っていく制度であります。この地では、元々 20 世紀中頃から、非常にコンスタントにロブスター漁が営まれてくるわけですが、アメリカは日本と違って新しく人々が移り住んできた土地でありますから、在地の慣習の法律がないわけです。ですから、未だに自由に誰が獲っても良いという漁業地域が、日本と違ってたくさんあります。そういう中で、自分達で新しく漁業の規定、資源利用の規定を作っていくのです。まさにその時に、人類学者が関わってくるのですけれども、地元の漁民が考えているエコロジカルなシステムや価値というものを、公的に法律を作り上げる権限を持っている公的機関が搦り取っていく。ただ、地元の漁師にも当然エゴイストな人も当然いますので、そういう人達の意見を調整しながら作っていく。そういう法律を 1995 年に完成させています。Co-management Law を制定するプロセスにおいて住民が関わりました。役割分担をして、住民が関与していく。そのことが、Co-management の中核的な意味なのです。

さて、次に資源のバランスと権限のバランスについてお答えしなければなりません。Co-management には、それが展開される地域ごとに様々なあり方が想定されます。けっして一元的ではありません。あるところで成功した枠組みやルールが、別の地域に即応用できるとは限らないのです。「国家、地方政府、地域団体、住民による責任分担」「住民の自律性の確保と、様々な決定プロセスへの地域住民の関与」「公的な制度としての正統性の確保(法的)」を、主たる思想と尊重して、資源バランスと権限のバランスを地域ごとに考えていくしかありません。

ただ、ここでいっておかなければいけないのが、日本でも法律が後追いといいながらも進んで来ている点です。ただ、この法律を見ていくと、やはり、いわゆる技術論が先行していく公の運動の流れがあったと思います。私は、技術論をすべて否定するつもりはありません。たとえば、ダムができて、堤防ができて洪水にならずに生きている人というのは、実際に洪水に遭っていませんから、それがなければ何人死んだかというのは目に見えてあわれませませんが、実に多くの人々が助けられていると思います。そういう意味では技術論を否定はしませんけれども、技術論だけが先行していくあり方を、社会論へシフトしていくことが、いま大事だと思います。つながりとかコミュニティー・ベースというのは、いわゆる社会論です。技術論で補えない、克服できない部分を社会論でやっていく。そういうバランスをとっていくことが、公的セクターの中で、非常に重要になってくるはずだと思います。それが、中谷内さんがおっしゃったような「信頼」の問題にもつながってくると思います。

水のリスク管理といった場合に、洪水の前の水防ばかりではなく、洪水の途中で逃げている時、洪水から避難した後、洪水後の復興期など、様々なステージを考えなければなりません。そういう時にこそ、社会論的な部分が非常に重要になってくるのです。国土交通省などの公的セクターには、是非とも「技術論から社会論への思考の転回」ということを期待したいと考えています。

最後に、他のコミュニティーとの比較ですけれども、これは非常に難しい問題でありまして、輪中と

いうのは確かに都市ではありませんけれども、高リスクな社会がとり得る方策というものに抽象化し、あてはめることができます。そういう意味では、都市においても社会的紐帯を作るべきだと、私は一応断言しておきたいと思います。そういう紐帯が生み出す負の面、すなわち、コミュニティーの内部には優しいのだけれど外部には厳しいという状況は、必ず起こり得ると思います。ただし、それがいわゆる過去のようなコミュニティーの構造のままで、昔の論理がそのまま通じるとは思いません。新しい社会紐帯が生まれる仕組みを作っていく。それが、いわゆる他者疎外的にならないことだと考えます。

【中谷内】

まず一点目のリスク認知とは何か、それは経験かというご質問ですが、リスク認知は「パーシーブド・リスク」とか「リスク・パーセプション」というものの略ですね。パーセプションとは知覚です。ここにペットボトルが見えるとか、鳥越先生の声が聞こえる。対象があつて、それを認識するということだったんです。が、何故それをわざわざリスク認知という言葉に変えているかと言いますと、リスクというのは実態がない訳です。「これはリスクが大きい」と、触ったり抱えたりすることが出来ない。そういう実態のない、社会的に構成されたものに対する認識というものになります。では、リスクとは何かということになります。リスクとは、「まずいことが起こる確率」と「そのまずさの程度」という 2 つの要素から規定される。ただ人によってリスクの概念そのものが全然違うので、リスク認知も捉え方が変わってきます。例えば、若い人が煙草を吸うことのリスクを過剰に見積もっているのか、過小に見積もっているのかという議論があります。いわゆる科学的な、あるいは技術的なリスク論でいくと、例えば肺ガンというものがエンド・ポイントになる。それになる確率はどれくらいか。例えば高校生に、「今 20 歳の方が 20 年間毎日 1 箱煙草を吸い続けると、肺ガンになる確率はいくらになると思いますか」と尋ねました。そうすると 100 人中 40~50 人といった、答えが出て来る。その答えは実際の疫学調査よりもオーバーしているため、若い人は煙草に対するリスクを過剰に認知しているという言い方をする論者もいます。それに対して反対する論者もいます。リスク認知というのは、例えばその場合だったら、煙草を吸っている高校生がいるとして、その自分が 40 人や 50 人の勘定に入っていない、「俺だけは大丈夫」と思っている可能性も高い。それから、そもそも肺ガンがいかに辛いものかを理解していない。それらを抜きにして、確率だけの推定をさせるのは、リスク認知ではないという言い方をする人もいます。それに対して技術論的な人は、そういうあやふやなことであれば、評価はできないと喧嘩になるくらいです。リスク認知の概念は、ちょっとあやふやなところがあります。少なくとも経験そのものではなくて、経験によって影響を受ける要素であるというのがご回答になります。

それから、一般市民の概念のあやふやさということですが、おっしゃる通りです。僕の話の中で一般市民という言葉がいくつか出てきたのですが、例えば 4 つのステーキ・ホルダーがいて、Whatcom の湖でモーターボート廃止運動を起こしている。これは一般市民なんですが、その人達は個人的な損得を考えたら時間を掛けてお金も掛けて、公聴会があると夜中まで粘って話をするので、これはもうステーキ・ホルダーと位置づけています。それから「Healthy Community Campaign」も、その単なる住民なんですけれども、この問題に対して深い関心を持っています。行政は非常に目立つステーキ・ホルダーです。彼らは一般市民に対する対応を考えるのですが、それでもこじれてしまう。こじれてしまった時に、数として勢力を持つのが、もう少し利害関係の浅い一般市民となります。わざわざ公聴

会までには出掛けないし、ストライキもしない、デモもしないけれども、でもその水を飲んだり、あるいはこのモーターボートに乗る可能性はある。全く関係ないフロリダ州の人とかは一般市民にはなりません。地域の住民で、関与する可能性はあるんだけど、積極的にわざわざ行く訳ではない。こういう人の意向が、こじれた場合には重要になって来る。そういう人の意向が、どのように決まるかを説明したのが私の話でした。

3 つ目のご質問の「合意形成が難しい」「結局、価値に配慮しなければならない」「価値の折り合いは難しい」「結局、トートロジーじゃないか」「難しいしか言っていないじゃないか」と言うのは、その通りなのです。「こんな方法でやれば、どんな時でも合意形成できますよ」という技があれば、私は東京まで出てこずに、何か催眠術師でもやって大儲けしている訳で、上手くはいかない。弁解なんですけれども、価値の折り合いというのは、私は信頼の文脈の中でお話したんです。今まで信頼を得ようとした時に、「これだけ科学的に合理的な解を私達は提供しているんだ」とか「私達は公正な、中立な立場で言っているんだ。だから信頼してくれる筈なのに、おかしい」というようなことに対して、「価値が不一致だと思っている人には、そういうことを言っても無理ですよ」という文脈の話でした。

それでは価値の折り合いや合意形成は絶対無理かと言ったら、そうでもありません。報告の中では紹介しなかった例ですが、宮守川改修事業という元々はコンクリートで護岸されていたところで、すぐその横に田んぼがある。その護岸された棚を外して、先祖伝来の田んぼを供出して、その代わり供出した人を助けるために別の田んぼを別な人が削るというかたちで折り合いをつけた。この他にも住民の意見を取り入れて、小さな河川公園みたいなものを作ったり、そこにトイレを作ったりしました。トイレを作るのは、今までの法律では非常に難しいことだったらしいのです。このようなことができた理由は、合意がなされた、そして、それは危機感が共有されたからです。実は、この村は何年か続けて水害に遭っていて、それからそもそも高齢化が進んで、荒廃している田んぼだらけでした。このままでは、村そのものが存続し得ない。そんな時に「俺の田んぼだ」「お前の土地だ」と言っていたら共倒れになるので、危機感が共有されていたと言えます。

これは変な例ですけれども、自民党は今「派閥をぶっ壊せ」とやっていますが、あれだけ言うということは、逆に派閥だらけだった訳です。何故このようになったかと言えば、社会党がだらしがなかったからとすることができるのではないのでしょうか。もしも社会党が非常に強くて、自民党が一致団結しなければどうしようもない状況だったら、派閥の利害云々と言っていられなかったと思います。こういった色々な事業も同じで、外圧が高まれば、中のグループとか、メンバー間の親和性が強くなるというのは、集団力学の鉄則です。ですから、実は我々は共通の同じ危機に瀕しているということを理解してもらわなければ、合意形成は難しい。ただ理解してもらおうにも、そもそも違う方向を向いていたら、それは勿論難しいんですけれども、危機意識を共有できれば、同じテーブルには乗り易いと思います。

【鳥越】

どうもありがとうございました。中谷内先生の魅力といいますか、報告の魅力は、この合意形成の困難性というものがあるのを、内部解剖して頂いたというか、そこが魅力でしたね。それから、それに合わせて具体的な例で、理解し易く説明して頂きました。

次の3人目の大窪さんのご報告の件ですが、法政大学教授の陣内秀信先生が、丁度この大窪先生と類似の専門分野なものですから、コメントをひとつ宜しくお願いします。

【陣内】

実は、一昨日と一昨日、我々法政大学の市ヶ谷キャンパスで国際シンポジウムを、同じく水関係でやっていました。雨水は災いの元になると同時に恵みであるということで、この時は災いは洪水と水害でした。今日の大窪さんのお話は、地震火災という災いですよね。特に京都では非常に重要だという問題提起で、しかし水が恵みとなってそれを助けることが出来るかもしれないという、非常に面白い、重要な問題提起でした。私は東京の色々なフィールドワークなどもやっているんですが、谷中や向島のような東京の歴史的雰囲気を持っているところは、みんな木造の密集地域で、都市計画ではダメだという烙印を押されています。しかし東京では、それが絶対に重要なんだとだれもが言っています。まさに東京で言うコンパクトシティはこうした場所なんです。しかし火災の心配をいつもしている訳です。谷中でも同じです。もう一方で、京都の景観に関して我々はものすごく関心を持っていて、この5~6年ずっと大きな研究会をやって、我々もしょっちゅう行っていました。ですから京都をどのように守るか、それは開発から守ると同時に災害から守るという、両方で非常に重要な課題でしたので、興味深く伺いました。京都は、重力を使って水を山裾から引っ張ってくる方法と地下水を利用している。それから蓋をしている川からも使えるというような、複合的な水の利用で、非常に恵まれている条件をお持ちです。東京の場合は、重力を利用できるような斜面がなかなかないものですから、結局は川か地下水かになると思って聞いていました。その地下水利用が、具体的にどのように日常的に可能性があって、ポンプアップしていつも使える状態になっているのか。それから、街路のところから水を立ち上げて守るという四面道路が巡っている街部モデルをお出しになりました。伝建地区の産寧坂は割りと斜面で、水が山裾から引っ張り易いと思いますが、都心の碁盤目型のなかにも伝統的町屋や路地がいっぱいあるという街区も想定しているような感じを受けました。そういうところで、内側では路地、袋地のなかに木造の長屋が密集しています。このような場所を、ご紹介されたシステムで果たして守れるのでしょうか。あるいは伝統的建造物群と言われているところを守って、普通の市民が住んでいる普通の町屋があるところは、対象になっていないのかということも伺いたいです。

それと「京都の防災には、誰がお金を出すか」という問題なんですけれども、京都は京都市民だけではなく日本全体の大変重要な文化財であり、国際的な価値があります。ですから特別な措置をして、予算をつけて、国家的に京都を守っていかうという方向での活動も随分ありますし、私もそういう立場で動いたりしています。しかし、国民の税金から京都を守る、特に水の防災的な観点からの仕組みを作るのにも非常にお金が掛かるとは思います。こうした場合に、どのように全国的な合意を作って、予算的な措置を講じているのかと言うメカニズムもお聞かせ頂きたいです。

それと、東京に関しても、こういう木造の伝統建築をどうするかということが、委員会とか専門家の間で話し合われて、なかなか簡単な結論が出てこないというお話も伺ったのですが、他の都市で、京都のようなメカニズム作りがなされる可能性を伺いたい。

それから最後に、耐火性のある町屋を開発するという話。現在、京都の町屋が非常に評価されて

いて、その価値が認識されています。ところが大半はコンバージョンと言って、イタリアン・レストランやバー、ギャラリーなどに変えてしまっています。こうして町屋はキープされるのですが、リノベーションして住み続けるということは、なかなか定着していません。今日ご提示頂いた、火事にも強くてしかも居住性もアップして、そして住み方やセンスを維持できるような町屋がうまく開発されればいいと思っています。ここではコミュニティの問題が提示されている訳で、町屋が全部レストランに変わったら、誰もコミュニティを支える人がいなくなってしまう、京都の中心に夜間人口がいなくなってしまう。町屋的な仕組みをキープしていくための組織を、どうやって育ていけるかと感じました。

【鳥越】

ポイントは、大変値打ちのある伝統的な建物群についての対策はよく分かりました。しかしながら、谷中なんて本当にそうですが、一般的な我々庶民、そんなに自慢する家屋でもないんだけど木造、あるいはそれ以外であるという一般的な建物については、どんな可能性を持っているのかというのが、1 つ大きな質問です。伝建地区に対しては予算がおりやすいと言いますが、一般庶民の方の予算は出してくれないことが予想される中で、どういう工夫があり得るんだろうかということです。

もう 1 つは今の町づくりのあちこちで起こっている課題で、建物だけの問題ではなく、内容の方が大切なのである。つまり建物を残したとしても、喫茶店になったり、別の用途のものになってしまって、そこに住まなくなってしまう。この理由は、やはり住みづらい訳です。これが町づくりで今大変に大きな問題になっている訳ですが、そのことについて、もし何かご意見がありましたら、伺いたいと思います。

【大窪】

非常に答えるのに窮する部分もございすが、まず 1 つ大きな課題として出して頂きました、伝建地区とかそういった貴重なもの以外の、一般庶民の人達の町はどうなるのかといった話ですが、私は元々は建築の方にずっと所属をしていたのですが、伝建地区とか文化遺産と言われるいわゆる遺産関係に拘ってやっている訳ではありません。大元は、都市の景観であるとか、デザインの部分を主体でこれまでやって来てまして、その中で、都市内の水環境がかなり荒廃して来てしまっている。それはかつて都市内水利が担っていた様々な役割が現代社会の中で失われてしまった結果、そういう事態になっていることわかって来ました。そこで逆に、非常に重要な役割を与えてあげることによって、都市が再生するのではないか。水際は再生するのではないか。そうして防災というツールを使って町づくりを行う。水際を中心とした再生が出来するというのが、根本になっています。その中で、一番多くの皆様に「これは何とかしなきゃいかん」と思って頂ける対象物が、文化遺産でありまして、そういう戦略的な部分も実際にはございすが、今回ご紹介しましたように、はじめは産寧坂の伝建地区の範囲を対象として検討していたのですが、その範囲は行政が線を引いただけであって、現実社会の中には線はありません。そうすると、その地域を風土として守っていくためには、そのポイントだけを守ればいいのかと言ったら、実は防災上は、延焼の及ぶ範囲として完全に一体化しているので、そこだけ取り外して守ることは極めてナンセンスです。また、文化「財」は国・行政が指定した特別に大事なものとなるんですが、文化「遺産」というと、誰にとっても自分の心の中の文化遺産というのはきっとあ

と思うんです。それは、地域の昔ながらの核になってきたものだったかもしれない。それは神社だったかもしれないし、小さな学校かもしれない。それをコアとして、自分達のアイデンティティを守っていくんだという動きに上手くシフトしていければと考えています。今回お見せしたのは、かなりお金が掛かる話でしたけれども、様々な方法を今考えております。誤解のないように言っておかなければいけないのは、伝建地区などの文化財と呼ばれているものだけを対象としている訳ではありません。それはむしろ逆であって、地域を守るために、それぞれの人の心の中にある文化遺産の部分、歴史の部分のアイデンティティをどうやって守っていくかという上で、やはり必要になるのではないかと考え、取り組んでいるところです。

その方法として、お金が掛かる方法は、お金を掛ければ何とかありますが、お金がない場合の話が出てきます。これらの提案をするためには、当然のことながら事例の調査をしています。例えば石川県金沢市が鞍月用水を景観整備のために整備したのですが、整備をやっている途中で、阪神・淡路大震災が起こったので、急遽事業変更をして、防災のための設備と一緒に整備するという例もありました。このほか有名な例では、世界遺産にもなっている岐阜県白川郷の合掌造りの建築です。あそこに実はこの案の元になった、重力を使った放水銃の設備が40年前くらいから取り組まれているという例がございます。

その他、河川と水路の水以外にも、日本は海に囲まれている訳ですから、海水を使っている事例があります。千葉県船橋市の消防局が、下水道は放流溝に逆流している特長を活かして、マンホールを改修することで、海水による消火を考えました。

それでも使える水が何もない場合には、雨水に頼るしかありません。墨田区の路地尊は、雨水を溜めるポケットパークを整備した事例ですが、地域住民へのヒアリングの結果、色々課題があることもわかりました。その辺りを色々踏まえると、あくまでも解は必ず1つではありません。むしろ地域によって無数にあるので、様々な地域特性と、その地域が持っている水、使えそうな水によって、色々なパターンが絶対に発生してきてしまう。それに応えるためには、一種のメニューみたいなものを、事例を調べて作っていくことによって、「その中でうちならこれとこれを組み合わせられるのではないかと引き出していけるようにする取り組みをやっているところです。

もう1つ、「地下水しか使えないところはどうすればよいか」というお話を頂きました。これは本当に京都にとっても頭が痛い問題でございまして、ご指摘のように京都は盆地ですから、真ん中の都心部には高低差がありません。この地域にも、京都で一番古い本堂建築と言われている、千本釈迦堂という国宝等の文化遺産があります。ここは本当に周りに高低差がない、延焼火災を考えると極めて危険性の高い地域にあります。我々はなるべく動力に頼らない、つまり複雑な機構に頼らないことが、むしろ安全ではないかと考えています。実はポンプのような動力を使うシステムについても、可能性がないかどうか、真剣に検討しています。産寧坂の伝建築の計画は、京都市の方で事業化が進んでいまして、その中ではモデルケースとして、高低差を使ったものだけではなく、ポンプも併用する考え方で、検討を進めています、将来的にはあまり複雑な機械に頼らない方向を考えなければならないのですが、現実問題として目前に迫った危険に対してどう対応するかということを考えていくと、その辺りのメンテナンスが掛かるし、努力も非常に必要になるのですが、ポンプの使用を検討しなければいけないだろうということになっております。

あとは、「誰がお金を出すのか」という話です。日本にとっての京都を守るという話になりますと、これは総論賛成な訳です。しかし、誰が、どのくらいお金を出すのかは、非常に大きな問題になって来ます。一つは受益者となる地域住民の方々に基金のようなものを作って頂いて、一定の義務を果たしてもらおう。もしくは、維持管理を地域で負担していただく。それによって、地域市民も分担するということが必要と考えます。それ以外に防災に関係ないお金を転用する考え方も出てきています。例えば農水省が持っている水路の改修費の一部を防災の役に立つようにする。普段は防災目的ではないが、いざという時に防災に使えるところのお金をうまく使っていく。実は事業を進めるためのマネージメントの研究もやっているところでもあります。そういったかたちで無い資金を何とか出さなければいけないということに対応しようと、考えているところでございます。

最後に建物の用途。耐火性のある町屋ということで、住まいとして成立させていくことに重要性があるというご指摘を頂きました。私もまったくその通りだと思っていました、やはり都心の空洞化が進んでいる大きな原因として、町屋は元々商売をするところと住むところが一緒でした。それが陣内先生のご指摘のように、本当にそこに住まなくなると、レストランみたいなかたちで改修されていくと、人がそこに根付かなくなってしまう。そうすると地元に対する愛着も無くなってきますし、コミュニティが育たないという問題になって来ます。現在は地価が安くなって来ているので、そこに若い人達にどれだけ住んで貰うかというのが大きな自分のテーマになっております。こうしたプロジェクトに対して、ご理解をいただけるというか、たまたま犠牲になっていただけるようなクライアントがおりまして、ご協力頂きながらやっているところです。そういう意味では、私も住まいとしての都市居住は、コミュニティ形成のうえで一番大事だと思います。住んでいないと地元になりません。

【鳥越】

どうもありがとうございました。それでは4番目の報告の沖さんのご報告、そのご報告に対しまして、京都精華大学の教授の嘉田由紀子さんにコメントをしてもらおうと思います。嘉田さんは、環境社会学それから環境史の専門家と言ったらいいのでしょうか。かなり幅広く現場を歩いておられる先生です。

【嘉田】

嘉田でございます。私は全ての方のテーマに興味を持っております。沖さんのお話の中で、日本の国交省・河川行政が大変な事業をして来ている。それがよくわかるお話だったと思います。そこで1つ、住民をどう考えるかです。これは中谷内さんのお話ともつながるんですけども、一般市民というような言い方。私達は住民の視点からの研究を過去二十数年やって来ているんですが、つくづく、住民は、市民は一枚岩ではない。まず割れるということを経験しております。先程のコンクリートは美しいという1つの表現に出会った時、私どもも現場で煮え湯をたくさん飲みました。そうすると、その人はどういう場面でこのことを言ったんだろうかということが疑問になります。自治会の会合だろうか、町内会の会合だろうか、それとも家の中でご飯を食べているところだろうか。というのは、人の意見は状況によって随分変わることを経験してきております。私達が経験したのは、「コンクリートの川か」「蛍が住める川か」ということです。ある人は、自治会の会合では「それはコンクリートの川がいい」と言う。で

も家へ帰ったら、「蛍も住んで欲しいな」と言う。1 人の人間が持っている多面的な意識というものをいつも考えなければいけない。その時に、人の意識の作られてくる背景を少し解剖してみるのです。その背景には経験というものがあるだろう。それは個人が蓄積してきた経験なのか、あるいはある社会集団の中での経験なのか。あるいは大きな社会として望ましいと言われている経験なのか。コンクリートの川が美しいと言っている人は、何故そう言ったのか。個人経験としたら、コンクリートでない川は草刈するのが大変です。あの草刈の労働は大変だし、やっぱりコンクリートの方がいいというのか、あるいはその地域としてかつて大変な水害を受けた。もう二度とあの水害は嫌だ。コンクリートにして欲しいという意識なのか。沖さんの文脈はこれに近いと思います。地域の共同経験ですね。ところが、こんなことも考えられないでしょうか。細々とした曲がった川は田舎で遅れていると言われて来た。それゆえ、スカッと直線的な方が望ましいと思われているかもしれないから、自分はそれを支持する。これは一種の大きな社会の流れです。20 年前は、明らかに農村部ではコンクリートの川が美しいと言われていたんですが、その同じ人が最近では、「やっぱり川は曲がっていなきゃ」と言い始めました。今、河川行政も、治水から環境という流れになっています。そうすると、「環境保全が大事なんですよ」「蛍が大事なんですよ」と言って来ているから、社会的に望ましい意識にいわばお付き合いをしている意見。今 3 つ申し上げたんですが、個人が自分の経験で言っているのか、共同体としての意識で言っているのか、この共同体というのは菅さんが言っているような、コミュニティ・ベースの意識です。水害なら水害を経験したというような範囲での意識。それか社会全体で望ましいと言われているから、そこに少しお付き合いをしておこう。この辺を分解して考えないと、人々の意識を反映した政策というのは出来ていかないと私は思います。

私は河川行政の方と随分お付き合いをしながら、やはり緻密に論理を組み立てられる方達が多いので、人の意見はコロコロ変わったりしますし、あまり人間と、特にその地域の方と付き合うのが得意じゃない方が多いみたいです。川と一緒にいっても、私はその川にいるお婆ちゃんに話を聞かなくて、その河川行政の人は絶対にそこにいるお婆ちゃんに話を聞きません。そのお婆ちゃんに話を聞いたなら、「ここはいつごろ水が来ました。どこまで水が来ました」という経験があるのに話を聞かない。それで「基本高水がどうだ」「ここは毎秒何トン流さなければいけない」という水利の計算の議論を延々とやる訳です。こうした河川行政のやり方に大変疑問を持っています。それで一番大事なものは、例えば神田川ですが、あれだけ短時間に地下に水を逃がすというのは1つの技術的選択なんですけど、どれだけお金を掛けるかということをご教示をしたいと思います。いわば個人の屋敷は私経済ですが、流した水は公共の負担で処理をする。これが日本が昭和 25 年以降、国土総合開発法を作って、治水公費主義というものを作ったがゆえに、すべて治水は自分は何の負担もしなくて、全部ただ乗りで良いことになった。公共事業あるいは大型開発の場合には、1000 m³以上で水を溜める義務がありますが。私が個人で例えば 100 m³の家を作って、コンクリートに全部したからって、治水費用を負担しないでいいんですが、社会的には負担しなければいけない訳です。それが全て公費になっているので、治水は全て陳情で、社会がやってくれるというシステムが出来上がっています。これにどこまで税金を入れられるんでしょうか。実は今のダム治水問題にも関わって来ることだろうと思いますので、その神田川の具体的な例が、数字がなくてもいいんですけども、治水費用の負担をどうするのかということ、教えて頂けたらと思います。

2 つ目なんですけれども、今日のテーマであるリスクを、どのようにして自分達の間に取り込んでいくかという時に、やはり日常性がポイントになるでしょう。京都で私共は子ども達のフォーラムの事務所を町屋で持っているんですが、この間も仲間が素敵な余紙で作った郵便受けを作ってくれたので出口に置いたんです。そうしたら大家さんから、「火事になると危ないから、あの郵便受けをやめて」と言われたんです。「火事になるから危ない」ということは、非常に重要な地域社会の物事を規制して来るというか、人に意見を言って来る言い分なんだとその時感じました。そのくらい、京都の町の人達は日常気をつけております。それゆえ、東京と京都と比べると人口当たりの火災の発生数は、東京に比べて京都が半分というようなこともございますので、そのコミュニティの問題。それからもう 1 つの事例で、滋賀県に日野川というのがあります。そこに小南という小さな集落があるんですが、もう毎年堤防が溢れたりして水害を受けて来たんですけれども、そこは水防団を自分達で作っているんですが、その水防の訓練なり炊き出しを、お祭りとセットにしています。具体的には、左義長の時に 1 月の大体 15 日、火を燃やすんです。「村人 300 人分の食料をどうやって作るか」「大きい鍋はどうやるんだ」「材料はどうなるんだ」ということを普段から練習できるように、左義長の時に炊き出し班を作り、それで阪神大震災の時にも炊き出し、大きな鍋を持って支援に行ったというような事例があります。昔の日本の地域社会は、祭り組と水防組と消防組というのはセットだった訳です。そういうことも含めて、いわば昔の組織そのものは再生できないけれど、その時の精神の持ち方なり、社会の仕組みの作り方というのは、ある意味現代にも活かすことが出来るのではないのかということが 2 つ目の指摘でございます。

【鳥越】

どうもありがとうございました。沖さんが国交省の動きと法律の動きをご指摘になった、そして国交省が出している数字を大切に思われて出されましたが、つつい言ってしまった「里川はコンクリートが美しい」という言葉から、これは研究の時の対象の捉え方の問題になってきます。どっちが正しい、間違っているということではないのですが、少なくとも嘉田さんの方からは、反論というかたちで出ています。これは中谷内さんとも絡んで来ますね。もしよろしければお答え下さい。

【沖】

まず私は別に国交省の手先ではないので、数字まで全部覚えている訳ではないですし、環七地下河川もあれは都です。菅先生が仰った昔の治水と今の治水の違いですが、昔は自分達の集落は自分達で守るという地先治水をやっていた。恐らく明治の初めまではそうだった。それが明治政府が出来て、廃藩置県で都知事やってくる。この知事は官制都知事、つまり今の知事みたいに我々が選ぶのではなく、中央から派遣された知事が各河川を仕切るようになると、結局国が全部治めるようになって、その時に比較的全国一律の治水をするようになり、お金は国で払うようになりました。それで信濃川の大河津や、もう少し後にあると荒川のようなところに放水路が作られました。そして、大規模な治水をやるようになって、「治水は国がやってください」という意識になって、防災意識が下がったというのは、本当に仰る通りだったと僕は思います。

そういう目で見ると、住民の手にある程度取り戻した方が良いというのは、もう財政に余裕が無いので、仕方がなく自分達を守るのは自分達のコミュニティのお金、もしくは比較的近いところでやってく

ださいというのが、税源・財源委譲という形になっているのではないかと思います。従って、悪い例として輪中根性が出ましたが、輪中的な堤防で集落は守りましょうという時代になりつつあると感じています。ある意味では江戸時代的な選択と集中ですね。昔のように力任せに出来ないことがあるとは思いますが、ある意味ではまさに技術者が技術層で生きられる、つまり今まではお金を掛けることで解決してきたものを、これからは限られたお金の中で守るべきものを守っていく一番の方法を考えるように変わって来ています。そういう意味で、お金がないのは、先程危機感が合意形成だというお話がありましたけれども、良いプレッシャーになるのではないかと思います。

地下河川について私は重要なことを言い忘れたんですが、千年持続学的視点に立つと、環七の下だけでなく外環の地下にも放水路が出来ていますが、あれは水を下に落としたりポンプで上げなくてはいけません。水利施設として風上にも置けないというか、あれは水利施設ではありませんね。水利施設というのは重力学を利用して、できるだけ位置エネルギーを落とさないように回しながら落とす。例えば琵琶湖疎水はポンプはありません。水を東山のところに持って来て、全ての川は京都は北から南にちゃんと流れているんですが、琵琶湖疎水だけ北まで行って、鴨川の西側まで行っている訳です。こうしたものが本来の土木としての水利施設であって、地下河川は、しょうもないなと思いました。1本2000億以上掛かっていると思います。とは言うものの、綾瀬川流域や神田川流域に人がたくさん住んで、緊急避難的にやる。しかも東京のように、お金がある程度使えたところに関しては、それを使っても良いと言うことで全員が合意したのではないかと、私は好意的に解釈しています。ただし今後は、持続的に使えるものを作っていきようにしなければならぬと思います。

【中谷内】

一口に一般市民とか住民と言っても一枚岩ではないし、それから一人一人も状況によって変わってくる。その通りです。文脈によって判断が変わってしまう。例えば、「この手術の成功率は95%です」と言われるのと、「この手術が失敗する可能性が5%あります」というのは、理屈では同じなんですが、受諾率が変わって来るという研究があります。3年ぐらい前、ノーベル経済学賞を受賞したカーネマンという人が、今までの経済学に対して、我々は文脈とか言い方次第で判断が変わってしまうことを強調した研究です。文脈によったり、同じ人でも言うことが変わったりするから、心理学のネタになって、我々は面白い。

ただし、最近河川法が改正されて、住民意見を反映させるとか、あるいは町づくりする時に、安全・安心の町づくりという言い方で、政策目標に安心という主観的なものを入れようとしている傾向があると思います。僕自身は心理学者だから、どんどん入れて欲しいと言わなければならない立場ですが、これは危ういという気がしないでもありません。例えば住民調査をやった時、僕等の常識としては、質問紙の作り方次第でYESという可能性を上げるやり方が出来る訳です。それを絶対視してしまって、何か政策目標が達成されたとか、これでやろうとかいうのは、文脈によって変わるからこそ怖い。

かと言って、今までのように役人の意見で推されても人々は納得しなくなった。だから住民意見の反映が言われていますが、安易に主観的な問題、安心というのを政策目標にして良いかというのは、僕自身も迷っています。

もう1つは役人が説明に来て、専門用語を撒き散らしてまくし立てて住民に納得してもらおうのは、馬

鹿だとは思いますが、でも基本姿勢として行政としてはそうであってほしいなとも思います。例えばお年寄りがいた時に、「お婆ちゃんのことを大事に思っているんですよ。肩でも揉みましょか」と言って納得してもらうのは、これはまやかしです。そうならず、言うなら愚直だけれども、「これは安全のためにこうしているんです」というのは主張すべきで、それはわかってもらわなければならない。ただ、その時に専門用語を並べて丸め込もうというのなら、それは大間違いだと思います。

それから後で言われたイベントとして防災対策をやっているという点に関してなんですけれど、これは大賛成で、大窪さんの発表された中で一番感心したのが、おじさんが水を撒いている写真です。災害対策とかリスク対策というのは、もう眉間に皺を寄せて「大変だ大変だ火が回る」とか言いながら長くはやってられません。楽しみがあったりベネフィットがあったりしながら、災害対策、あるいは災害・防災の準備になっているという、日常生活に組み込む、楽しみとして組み込むというのは、大変大事だと思います。

奈良で1年前に女の子が誘拐されて惨殺されたという事件からちょうど1年経って、「事件を風化させるな」とよく言うんですが、放っておいても風化してしまいます。一方で、積極的に風化させなければならない面もあります。毎日学校から家へ帰って来たら、「ああ、今日も命がつけけた」なんてことになったら、それはまずい。やはり友達と楽しく学校へ行こう。けれども、風化してそういうリスクがあることを忘れてはいけないので、楽しみの中かで避難対策をとるとか、子どもを守る家に入って行くというのは、イベントとして何かやるというのが大事だと思います。

大窪さんがやられた木の壁になっているお家に水を撒いて湿気を作ることも、あれが観光にならないかと思いました。夏になって暑い時に水を撒いて、子どもとかを走らせる。あるいは「この水に触れると癌封じになります」「清水寺のご利益があります」とか、嘘八百ですが、そういう何かポジティブな楽しいイベントというかたちで、なおかつ予行演習になっているようにするのが、僕はすごく大事で、そうでなければ続かないと思います。

【沖】

続きで頂いた質問について簡単にちょっとお答えする前に、今の中谷内先生の話で、宮村忠先生の「水害」という本を思い出しました。常備箱があって、水害の時はこれを持って逃げるという中の食べ物をツマミとして食べながら話をしてくれて、それが無くなったら次にまた補充するんだという話が載っています。やはりそういうふうに、普段使うこと大事だと思います。

都市河川の暗渠化について、都市雨水貯留に問題があるのではないかというご質問がありました。浸透に関しましてはどこでも大丈夫という訳ではなくて、台地の下の谷のところの川ですと、あまり浸透施設を入れても浸透しませんので、そういうところには浸透施設は置かないでしょう。なおかつ、暗渠か開渠か、つまり上に蓋のない都市河川か。上に蓋がされている河川は、恐らく昭和40年代くらいに、「臭くものには蓋」ということで蓋がされた。臭かった川の話ですので、今の大規模下水道と同じと考えれば、私の発表で見せた目黒川も普段流れているのは下水の処理水ですので、暗渠にしたから都市の雨水貯留に問題ということは浸透施設に問題ということはないと思います。

東京都以外の都市水害についての話ですが、各地でありますけれども、大規模だったものでは例えば2000年の東海水害が挙げられます。あれも雨が非常に激しかったことは確かですが、特に被害

の大きかった新川といい、庄内川の放水路的な役割をしている川は、自分の集水域に流れ込んでくる宅地が広く広がっていたのです。本来は木曾川が流れていて、庄内川が流れて、新川が流れているのですが、木曾川から水利施設として農業用水を取って、それが田んぼを流れて落ちるのが新川で、その排水を新川に流してた。洪水の時は庄内川も特に流す。そんな役割の川だったのですが、この間の田んぼが都市化したんです。ただし都市化してもそこに豪雨がこない、都市化した影響が出て来ません。それで都市化自体は1980～90年代に起こっていた訳なんですけれども、たまたま豪雨が起こった時に顕在化したというのが東海豪雨の水害になります。同じようなことが、1999年と2003年に福岡の博多駅が水没した時も、あれは上流の大宰府などの宅地化が進んだんですね。日本全国実はそうなんですか、たまたま1980年代、90年代はじめくらいまでは、大雨が少なかったんです。ちょっと象徴的な言い方で申し訳ないんですが、一言で言うと、雨が少ない時期が1970年代後半から80年代、90年代の初めまでであった。その間に都市化が進んでも、なかなか都市化によって都市型洪水が深刻になることに気付かない時があったのが、最近になって豪雨が増えているので、それで明らかになりつつある。象徴的なのが博多の例と名古屋の例ですけれども、他にも福井の例もそうだと仰る方もいますし、新潟の例も小規模ですけれども、ああいう小さな支流のさらに上流のところ都市化が進んでいくというのが必ずあると思います。これに関する結論としては、自分が住んでいる川の上流で都市化が進んだけれども最近豪雨がないなというところにお住まいの方は注意した方がいいということになります。

それから人が生きるのに十分な面積、コンパクト・シティは必ずしも六本木ヒルズ型じゃないという話ですが、こちら辺が一番やっぱり価値観に関わってきます。私が京都の地球研というところに2年間近くいた時に家を借りたんですけれども、何処に借りようかと思った時に、やっぱり先斗町とか木屋町から歩いて、酔っ払っても這ってでも帰れる辺りがいいだろうということで、三条船屋町に借りました。ただしそんなところで普通の町屋は借りられませんので、町屋の後の宅地に非常に細長い形のマンションを建てたようなところのある階に住んでいて、これは平屋だったら多分家賃が4～5倍でとても住めないんですけれども、高層だったからこそ住めた。間口が1軒半、奥が十数メートルという本当に京都市的な間取りなんです、そういうところでやっぱり私が満足だったんですね。町屋も訪れて、確かに坪庭で何か空を見ながら京料理を食べたというのもなかなか良かったんですけれども、そこはそのどうい暮らしがいいかと思う違いがあって、恐らく私のように団地で育った子ども時代からだ、それに抵抗がないのかもしれないという気がします。例えば500～1000年前を考えてみますと、例えば京都に初めて来た地方の人は、町屋を見て「こんなところに住めるか」と思ったんじゃないかと思えます。それまで広いところにポツンポツンと家があるような、自分の庭があるようなところにいた人が、京都のあんところで坪庭の小ささに驚く。ところがそういうのがやっぱり今は良いという価値観があるとしたら、それはやはり自分が育った環境や、色々刷り込まれたものに、依存していると思いますので、それは必ずしも共有しなくてもいいと思います。ただ都市ということ考えた時に、先程の京都の例で言いますと、高層はダメだということにしたなら、私はそこに住めなかった訳です。東京とか神戸の例もありましたが、「神戸でどれくらいが必要なんですか」「どれくらいの人達が住みたいんですか」と言った時に、やはりたくさんの方が住んで、かつ空き地もあるというのを可能にするのは、そういう公共の空き地、緑地、高層の住宅というのが1つの解になります。それが嫌な時には、そこに住まないという

選択も勿論ある訳ですから。

水害に対しては、3階まで来る洪水は普通のところではありませんし、そうすると菅さんのように上げ仏壇なんて絶対なくていい訳です。周囲に神社、仏閣というのは、都市の中で非常に重要な空き地、共用の緑地ですが、そういうところでもし水が必要になった時にはタンクから水圧で水が行ける。こう考えると夢の高層建築のような気がして来ますが、全部がそうならなくてもいいですけども、1つの考え方として、どのくらいの高層化だったらどんなことが出来て、どういうふうな進め方が出来るかというのを考えてみるというのも非常に頭の体操になっていいのではないかと思います。

最後に「誰にとってのリスク」という話に関しまして、中谷内先生の段々被害軽減に払うお金が段々要らなくなってくるという話と同じで、治水は日本はかなり進んで来たので、あまり払わなくていいと思っているでしょうし、かつ今はかなり特定の比較的特定可能な少数の人々の命を救うためになって来ているのではないかという気がします。ただし、財産が失われるとか、不便を蒙るという意味ではもっと広い被害を受けると思います。

そうしますと、特定の比較的少数の人達を救うために、皆の公金を投じるのかという問題が当然出てくる訳で、そこはやはりあまりにも少数の場合は、そこに住むのをやめてもらおうという意見が出てくるのは当たり前で、実際土砂崩れに関しましては、新しい土砂法でそのようになりつつありますし、河川法も恐らくそうになっていくんじゃないかなと私は見ております。ただし、公共でやるものは、儲からないからやるというのは大前提です。何故公共でやらなければいけないかと言うと、やっぱりそれは自分達で自分達を守れない人達がいて、その人達も守ろうじゃないかと社会が意志を持っている。もしくはそうは言っても自分達の利益にならないと自分の税金を使って欲しくないという人には、例えば「貴方がこれだけの一軒家に住めるのは、あの貧しい人達があの狭いところに密集して住んでいるからで、そこが安全だから貴方は一軒屋に住めるのよ」という説明をするというやり方もあります。本来は社会福祉として治水はやっている面が僕は大きいのではないかなと思います。

リスクということに関して、今マンションの構造設計の問題で色々、皆さんすぐに大丈夫かという話がありますけれども、あれは考えてみると今危ないと言われているマンションも、震度5強の地震が来ても壊れるのは1割ないんじゃないかと思います。つまり震度5強に耐えられる設計とした時に、震度5強より強いのが来たら全部100%壊れるような設計というのはあり得ない訳です。下手をすると震度6が来ても全部壊れなかったりするのです。一方で信頼性の問題も出てくると思いますが、専門家が「これは安全だ」と言ったら「何だ壊れてダメじゃないか」といい、今度は「震度5強でも危ない」と言ったら、皆もうすぐにでも壊れるように思うというのは、何故なのでしょう。もっと危ないのは、先程木密住宅と仰った地域で、必ずしも耐震性が確保されていない家がたくさんある訳です。そういうところのリスクをどうするのでしょうか。これは本当に深刻なことで、自分の家を自分で守ることになっているのに、それに関しては非常にリスクを甘く見る。これは安全な都市ということを考えて時に、どうしても避けられない問題だと思いますので、最後に述べておきたいと思います。

【菅】

このままいくこのフォーラムは多分面白い展開にならないと思いますので、発言します。ぜひ冲さんに。いまの質問、それから全体にも関わるのですけれども、コンパクト・シティに対する意見も含め

て、沖さんの意見の中では「人の住む町」というイメージがまったく浮かばないのですね。

沖さんがいう、いわゆる「個の自由」、あるいは「個の権利」というものを主張して、その快適さを求めるというのは、ひとつの方向性にすぎません。もちろん、我々は近代に育って来ていますから、「個の権利」の重要さは認識しています。ただ、それが極端に行き着いて、様々なリスクを生み出している現実を目にすると、やっぱり私みたいに古臭いコミュニティーという言葉も、また出さないわけにはいかないわけです。

沖さんが、一番最後の部分で述べられているリスクの話も、実はすごく個というものを重要視されている。私なんかは、もっと逆に考えます。いま、個の自由が認められている日本の社会においても、個の制限というのは、コミュニティーというものにあっては当然あり得るという立場に立っています。それが何故あり得るかという、実はそれがあることによって、リスクというものが軽減されるのだということです。また、リスクというものを減らしたければ、そういうある種の権利や主張の制限というのは、当然受けています。そういう部分を、やはりちゃんと受け止めていかなければならないだろうと思うわけです。

沖さんに敢えていうならば、今日は非常に明快に、親心として国土交通省の意見を代弁していただいたと思いますけれども、ただ公的セクターといっても、実はそういう治水だけの話じゃなくて、最近河川利用のこともちゃんとやっているわけです。そういう治水というものの以外の部分のことも、実は考えているわけです。ただ、今日、沖さんのご意見は明らかに治水の技術論偏重。すなわち、「人」というものが登場しない。沖さんの話は、「人間不在の議論」になってしまっている。そんなふうに、私はどうしても思ってしまう。

【鳥越】

沖さんは最後の方に、沖さんならではの個性を発揮されて面白くなってきて、そして、菅さんが当然するであろう反論をされて、大変面白かったと思います。

今回は「リスクに強い水利都市」というやや固いテーマだったんですが、今、日本でこういうテーマで語ってくれて、私達に刺激のある人は誰だろうということで、この4人の先生方をお願いして、快く引き受けて頂きました。きちんとした議論がありながら、それぞれに論理上の隙があるというのは決して悪い意味ではなくて、冒頭に言いましたように、それが契機になって何かもう1つ新しいものが考えられる。それから、迷っている事柄というのも実際ある訳ですね。報告する時には、何かきっちり喋っているようだけれども、本当は迷っているところがいっぱいあるのではないのでしょうか。聞いている方々自身も同じように迷ったり考えられていて、ということがあると思うんです。そういうことが、やはり今私達が考えていく意味で、大変大切だから、それをも含めて議論しようということで、その目的は達したかと思います。

4人の報告者の方々は、それぞれ勿論専門も違いますし、立場も違いますから、意見は異なっていたかと思いますが、他方、共通しているところも明確に存在しているように思いました。それは、やはり今の社会の流れですね。社会がそうさせているというところはあるかと思うんですが、住民が持っている資源をもう一度見直そうというところですね。住民の大切さと言ってもいいのかもしれませんが、ひとりひとりの人間が資源を持っている。資源というのはお金だけではありません。自分の生き方、価

値観も含めたもの、すべての資源を持っている。住民が資源を持っているこの価値を、きっちりと見よう。あるいは住民の人達は今度は逆に権力も持ち始めている。権力というのも、広い意味の権力なんですけど、対行政との関わりにおいて、権力を持ち始めている。そうすると、好きだとか嫌いとかに関わりなく、こういう権力を持ち始めた住民の考え方、あるいは組織化されたもの、それを我々の視野から外してしまうと、有効な政策はうてません。これは新しい時代の流れだろうと、この流れを一応踏まえたいうえで議論をされたと思いますし、菅さんが最後に言われたことが、すごく大切なことで、私達住民一個一個が主権を持ち権力を持つということは、逆に言えば一個一個の住民が制限を持つことだという、つまり無制限に自由に動けることではなくなるんだ。つまり現場というものは、地域社会で生きている限り、自分の思い通りに出来る訳ではないし、自分が偉いんだと言ってそれが実行できる訳ではない。結局皆で考えていかないといけないという言い方になっているのは綺麗な言葉であって、実際はやはり制限を持たざるを得ない。そこの制限のなかで、私達はどんな工夫をしていくのか、ということが今問われているところですよ。そういうことを色々な角度からこの4人の報告者にして頂きました。

大変面白い報告でありがたいと思っています。また、今日お聞きくださった方々で、こうしてテーマを出して下さって、私達の議論を助けて頂きましたことを、感謝申し上げます。どうもありがとうございました。